

第2回目の学校評議員会では、4名の学校評議員の出席のもと、学校経営方針に基づいた今年度の取組や学校評価について説明をしました。評議員からは各内容について評議し、学校経営にかかわる意見をいただきました。

日 時：平成28年12月16日（金）13：30～15：00

出席者：学校評議員 齊藤 文美 様（真駒内東町町内会長）  
菊地 ひとみ 様（札幌肢体不自由福祉会施設長）  
堀内 紀久美 様（NPO法人MINNAの会理事長）  
戸倉 聡 様（日の出歯科真駒内診療所 副会長）

学 校 宮崎校長、佐橋副校長、野中教頭、英事務長  
部主事（小柳、渡辺晃、安達）

内 容：○今年度の取組の説明 ○学校評価の説明 ○質疑及び意見交換



教頭等より平成28年度の取組について説明しました。

#### 1) 保護者とのコンタクトポイント研修会について

【教 頭】本校では、「保護者が、教育内容、教職員の対応に安心する学校」を目指している。保護者とのかわり方で大切にしていることなどをアンケート調査し、「保護者の気持ちや状況を想像する」ことの大切さを全員で確認した研修を行った。

【校 長】教職員自身が保護者として、今まで受けた残念な対応、素敵な対応についてまとめた資料は参考になった。保護者の対応について振り返る機会となった研修会であった。

【渡辺晃教諭】資料では、同じ意見をまとめようとしたが、少しずつニュアンスが違うため、それぞれの先生方が大切にしていることと考え、全てを掲載し、教職員間で共有した。

学校評議員からは、それぞれの職場等で留意している点について意見をいただきました。

（菊地評議員）「迅速な対応をする」「分からないことは保護者に聞く」ことを職員に徹底している。保護者は「連絡をしてくれて安心」「分からないことを聞いてくれたのはよかった」と言っている。

（堀内評議員）店に来ていただいて心地よく過ごしていただくために、話しかけた方がよいのか、音楽を一人で聴きたいと思っているのかなど、相手が何を求めているのかを気にかけて関わっている。

保護者は、学校の先生には、自分の子供のことをどれだけ知っているか、知ってほしいのかを求めているのではないかなと思う。子供と向き合うことが保護者対応につながると感じた。



#### 2) 井戸端ミーティングについて

【教 頭】本校では、「教職員が一丸となって教育活動を展開する学校」を目指している。教職員間の連携は日頃行っているが、よりよい関係性をつくっていくために、興味・関心に基づいて体験・共感する機会を設定した。「授業で使いたい」「仕事以外の話を新たな発見ができた」などの感想が聞かれている。

【副校長】知り合うことで同僚性を高める活動を設定した。協力し合う風潮をつくり、子供たち、学校のためにつながる活動と考えて実施した。

学校評議員からは、井戸端ミーティングについて質問や意見をいただきました。

（菊地評議員）全員が参加されているのか。

（齋藤評議員）先生方のコミュニケーションをより深め、子供たちにつながる取組だと思う。この取組の評価をすることが大切だと思う。

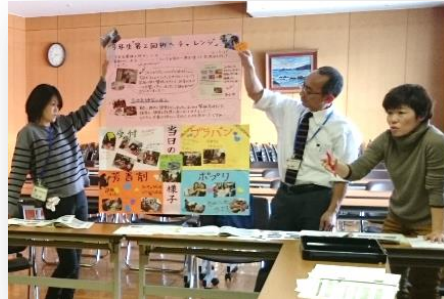
【副校長より】出張等で開催できなかったミーティングがあるが、基本的には、全員参加の取組である。

### 3) 小学部の教育活動について

【小柳教諭】小学部では「入学の不安を取り除き楽しく教育活動ができる」「見通しをもたせるなどにより主体的な活動を伸ばし、生活の力を育てる」2点について教職員間で確認してスタートした。種まきで土に触れるなど、初めての経験や機会を大事にした教育活動を行っている。

### 4) 中学部の教育活動について

【渡辺晃教諭】中学部では、小学部で獲得した基礎的スキルを活用し、他者との協力を大切にした学習に取り組んでいる。3年間で3校と交流及び共同学習を行ったり、地域生活をしている卒業生の話を聞く「ようこそ先輩」を実施したり、校外学習でも職業体験をしたりするなど将来の自立に向けて取り組んでいる。



### 5) 高等部の教育活動について

【安達教諭】高等部では「地域との接点を増やす」「生徒の力を発揮する場を増やす」ことを意識した活動を行ってきた。高3は、「街へチャレンジ」という校外学習で、地域の方との交流会を企画し、授業で製作している芳香剤等の作り方を教える取組を行った。地域の方にも喜ばれ、生徒たちにとっても満足感が高い活動となった。今後も発揮する場の設定のため、今回のような「街へチャレンジ」という既存の学習を見直していく。また、地域生活を見据え、教職員自身も実際に地域に出向くなどの取組が重要と感じている。

## ◎ 学校評価の説明

副校長より今年度の学校評価の取組について説明しました。

- ・学校評価のコンセプトは、「教職員が元気の出る学校評価」である。
- ・各部、分掌等から学校経営方針の重点目標に対する重点的な取組（評価項目）を早い段階で全校に提示し、何を評価する1年とするのかを教職員一人一人が意識できるようにした。
- ・重点以外に「今年度の取組の各部の売り」を提示し、教職員から自己評価を行った。
- ・本校に関する印象などを把握するために、事業所など学校に出入りしている方にアンケートを実施した。
- ・保護者アンケートは、3学期初めに集約する予定である。
- ・現在、分掌等で「年度末反省」と関連させ、学校評価として分析をしている。

学校評議員からは、学校評価の取組に対して質問や意見をいただきました。

（戸倉評議員）例年、学校評価ではA～Eの評定をつけている。基準の根拠を明確にすることが必要であると思う。

【副校長より】その数値でよいのかは、項目によって一律では言い切れないと考えている。分析をする中で整理をしていく。

（菊地評議員）教職員の自己評価を見ると、「？」が多い気がする。評価の点数に反映しているのか。

【副校長より】評価の点数には反映していない。「？」がなぜ多いのかを推し量る分析をしていきたい。

【校長より】自身の所属のところで「？」をつけている場合があり、このことについては整理をし、対応を考えていきたい。

（戸倉評議員）「？」は評価とは言えないと思う。「？」を評価尺度として扱わないことは考えられないか。相当な数が「？」だと、統計的に意味がなくなると思う。

【副校長より】「？」の多さについて考察を加え、次年度の材料としたい。

（菊地評議員）小・中学部、高等部がある学校において、他の学部のこと分からないのは、いかがなものかと思う。全学部の先生が評価するのであれば、各学部の取組が見えていないといけないと思う。

【校長より】課題としてとらえている。今年度はアピールしている項目を設定したのにもかかわらず、そうではない状況がみられる。アピールが足りなかったのか、評価しづらい項目だったのか、「？」の意味を分析していくことがポイントになると考えている。